

1. 取組の背景

那賀地域は県内一の桃産地であり、特に「あら川の桃」というブランド名は京阪神に広く浸透している。

しかし、近年は収穫までに強風雨にさらされる事が多く、発芽前の温暖な気候もあり、せん孔細菌病や、温暖な気候によりカイガラムシ類の発生時期にずれが生じ、防除効果の低下により、多発を招くなどの問題がある。更に、平成29年にかつらぎ町において発見された特定外来生物「クビアカツヤカミキリ」の侵入も懸念される。

そこで振興局では、せん孔細菌病の対策試験や、カイガラムシ類の発生時期の予測、「クビアカツヤカミキリ」の侵入・拡散防止に向けた取組を行う。

2. 活動内容

(1) モモせん孔細菌病対策試験

・発芽前無機銅剤散布（3月防除）の薬剤の違いがせん孔細菌病に及ぼす影響について調査を行った。

(2) カイガラムシ類発生予測技術の開発

現地のカイガラムシの発生状況について、調査園を2地点（紀の川市桃山町段、段新田各1ヶ所）設置し、発生時期を確認した。

また、発生園におけるカイガラムシ類防除の薬剤散布試験を行い、その効果確認を行った。

(3) 特定外来生物「クビアカツヤカミキリ」監視に向けた体制構築

将来的に那賀管内に侵入が想定される「クビアカツヤカミキリ」を監視する体制を構築し、侵入防止に向けた調査地点の設置を行った（管内96地点）。



写真1 「つきあかり」調査

3. 具体的な成果

(1) モモせん孔細菌病対策試験

防除薬剤の違いによるせん孔細菌病抑制効果は、新梢・果実への発生が無かったため、確認できなかった（データ略）。

(2) カイガラムシ類発生予測技術の開発

令和元年度に枝枯れ等の被害が発生したカイガラムシ類の対策で、2年前から取り組んでいる。本年度はナシマルカイガラムシ歩行幼虫の発生時期について予測と防除薬剤の検討を行った。シロカイガラムシの時と同様に、JPPネットの有効積算温度計算シミュレーターを用いた予測と両面テープトラップによる実測を合わせ、JA紀の里協力のもと、ナシマルカイガラムシの防除適期について情報提供を行った。

発生初期の予測日は5/18、7/15、9/15で、実測による歩行幼虫の発生は5/21、7/18、9/24で1回目、2回目の発生については正確に防除適期を予測できたと考えられたが、3回目の発生は9日のズレがあり、防除適期の判断に資する予測とはならなかった。これは、夏期の高温による成長停止を正確に予測できなかった事が原因と思われた（図1）。

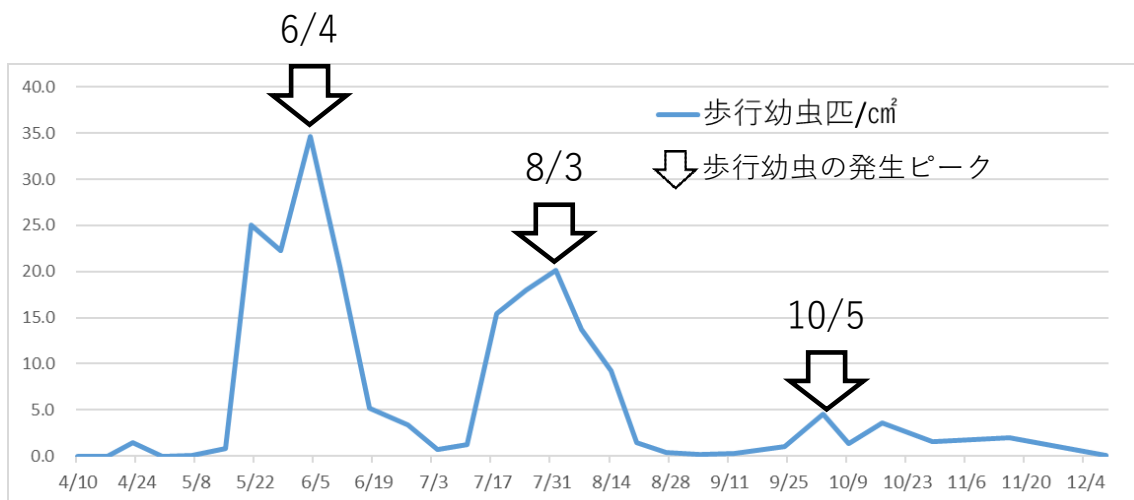


図1 令和2年度ナシマルカイガラムシの発消長

※ 調査樹3本から回収された両面テープ1cm²/3ヶ所の平均値

また、防除薬剤の検討は令和2年2月21日にハーベストオイル25倍、50倍希釈した薬剤にそれぞれアプロード水和剤1,000倍を加用した薬剤と展着剤のアビオンEにアプロード水和剤1,000倍希釈の薬剤を散布して検討したところ、ハーベストオイルが入っている処理樹では倍数に関わらずその後のナシマルカイガラムシ発生が0であった。これに対してアビオンE+アプロード水和剤処理区では生育期に入り、歩行幼虫が発生してきたことから、ナシマルカイガラムシ発生圃場ではハーベストオイル50倍+アプロード水和剤1,000倍液の散布による処理が効果的であると思われる。

(3) 特定外来生物「クビアカツヤカミキリ」監視に向けた体制構築

令和元年にかつらぎ町において被害樹の発生が確認された「クビアカツヤカミキリ」は令和2年5月7日に岩出市山崎で被害樹が確認され、その後、岩出市金池、紀の川市北志野で5園地12本の桃から幼虫及びびフラスの発生が確認された。

これを受けて、那賀地方病虫害防除対策協議会(※)にて防除啓発チラシの作成・配布と、クビアカツヤカミキリ防除対策研修会を行った(69人出席)。

また、被害園地周辺及び管内全域のモモ、スモモ、ウメ、サクラが植栽されている1,244地点に対して巡回調査を行った。

4. 農家等からの評価・コメント

(1) 実証園設置農家 M氏(桃農家)

せん孔細菌病は農家所得に直結する課題であるため、継続した対策への取組をお願いしたい。

(2) 調査圃設置農家 Y氏(桃農家)

令和元年度にカイガラムシ類が圃場内で多発し、枝枯れや樹勢の低下を招いてしまった。提供を受けた防除時期の情報を元に防除を行ったところ、カイガラムシの被害が減少していったため、予測情報の提供はありがたかった。

昨年の同時期(12月)と比較して、カイガラムシ類による周辺農家への被害状況も

改善したように思う。今年度は結果枝が被害に遭ったため、生産量を減少させてしまったが、令和3年度産は収量増が見込めると考えている。

(3) J A紀の里指導員T氏：カイガラムシ類の防除に関しては予測に基づく防除指導と、栽培暦の改変により、生産者の声や果樹の営農指導員から被害は抑制されたと思われる。このまま圃場内の密度を下げて、安定生産に結びつけたい。

「クビアカツヤカミキリ」については、管内に被害樹が発生した事により、被害圃場周辺への定着が懸念される事態となった。関係各者の協力のもと、産地における蔓延防止、安定生産に向けた抑制技術の開発に向けた取組を展開してほしいと考えている。

5. 普及指導員のコメント(那賀振興局農業振興課・主査・北原伸浩)

(1) 令和元年、2年と結果的に春先の天候に恵まれた事により収穫物に対してせん孔細菌病の発生がほとんど見られなかった。この事が生産現場でせん孔細菌病への備えに対する優先順位が低く考えられているように思える(銅剤の散布、防風樹・ネットの設置など)。

平成30年に受けた台風の被害による影響が残り、次年度も収穫量の増加が見込めない事から、病害に対してはきちんと産地指導を行い、被害を抑えていきたい。

(2) カイガラムシ類の予測技術に関しては、ここ3カ年の取組により、産地でのカイガラムシ類が蔓延した圃場というのは見られなくなったと思う。ただ、令和2年秋期の調査では薬剤散布により栽培期間中には見られなかった歩行幼虫の発生が見られる圃場もあったため、油断せず、次年度もしっかりと防除対策を進める。

(3) 「クビアカツヤカミキリ」が管内の桃圃場にて発生してしまった事により、生産者の間では緊張が高まっている。旧桃山町の段や段新田といった桃栽培の中心地にあっても柿や梨、ブドウの栽培をはじめ生産者が出てくるなど、桃に対する危機感は非常に強い。

桃是那賀地域の農業を支える主力品目というだけでなく、地域産業の活性化にも貢献しているため、「クビアカツヤカミキリ」の蔓延防止は産地においても大きな課題と考えられる。

6. 現状・今後の展開等

(1) せん孔細菌病対策：発芽期以降の防除技術について、防除体系の確立に向けた取組を進める。

(2) カイガラムシ類の予測技術は秋期の発生予測に技術的な課題がある。今後も精度を向上させるため、関係機関と協力し、正確な発生予測を行えるようにしたい。

(3) 「クビアカツヤカミキリ」農業関係者だけでなく、地域の自治体と協力し、蔓延防止に向けた取組を進める。